

そのひと言が 聞きたくて

今回は 中村繭子 さん

あの「冬ソナ」のロケ地として一躍脚光を浴びた、韓国唯一の観光地・江原道。アジアの玄関である福岡にある観光事務所のスタッフとして、かの地のPRを一手に引き受けている中村繭子さん。復讐軍閥で頑張る彼女にインタビューしてきました。



中村繭子 韓国 江原道観光事務所（日本）マーケティングマネージャー。西南学院大学文学部外国語学科英語専攻（異文化コミュニケーション）、サンディエゴ州立大学コミュニケーション専攻。西南学院大学在学中の2002年10月から同事務所設立にかけわり、2002年11月の開所とともに同職に。語学は英語、韓国語、スペイン語、中国語。趣味は海外旅行、読書、サルサ。
<http://gangwondo.ecoclog-nitty.com/blog/>

ゼミと掛け持ちの 事務所開設

韓国に9つある自治体の一つ、江原道（カンウオンド）・日本唯一の観光事務所の、これまた唯一のスタッフである中村繭子さん。大学では英語を専攻し、第一外国語で中国語を学んでいた中村さんがなぜ？

「大学3年のときにアメリカに留学して、戻ってきたときにはすっかり就職活動も終わりがけ。たまたま大学の掲示板を見ていたら、この事務所設立スタッフが募集されておりました。海外とつながりのある仕事をしたいと思っていたので、男性のみであったので、がととあえず連絡してみたら、採用されること」ところが事務所のオゾンはその年の11月、まだ学生だった中村さんはゼミと掛け持ちで、事務所の工事に立ちあがって、電話線まで引いて、ハンダルは教室通いと実地レッスンのような形で、スケジュールができる程度。まだ習得、それにしては不安はなかったのですか？

「最初は大変でした。どう動いているのか、何を期待されているのか、まったく分からない手探りの状態。現地も野放しという感じで、自分で計画を立てていろいろ提案しました。だけど自分のやりたいようにやるのが好きなので、まかせてもらえるところのそのむところでした」

「日本人は前もって計画を立てて、手順を踏んで物事を進めていきますが、韓国の人はギリギリまで決まらない。いつも直前にやって慌てるんです。間に合えば、結果よければOKの世界なんです。段取りはないし、キツい。なので、自分のルールに合わせて進めるようにしています（笑）」

「開所しばらくは静かな日々、ところが半年自にあの『冬ソナ』が放映され、ロケ地だった江原道への問い合わせはばんばん電話が鳴りました。福岡にしかないので、プロモートは全国区。各地で旅行会社やマスコミ向けの説明会や一般対象のイベント、はまたた俳優を呼んでのトークショーと業務は多岐にわたります。一人じゃ大変なので、

「確かに誰かに相談したいし、自分が考えている方法でいいのか、志が正しいのか悩むこともあります。そんなときは仕事を頑張っている友達に話を聞いてもらったり、や、仕事を通じて知りあった方々からアドバイスをもらっています。それから本、疑問があると、解決の糸口がつかめそうな本を納得いくまで読んでいますね」

「開所してからは、いろいろあるし、100%出来ていないとは思ってない。気が負っていても事実一人、土産に韓国の子どもたちが作った輸入りのハンカチをあけたら、子どもたちがハンダラにすく興味を見せてくれたそうなんです。以前のようには、みんなを同じように集めるのは、人の価値はそれぞれになってきています。外圍だからというのには関係なく、いろんな人や文化を受け入れて上手に付き合えることが大事。いろんな人がいて、それでいいと思える、そういう考え方に気づきつつかけにすればと思うのです。観光地をただ紹介するのではなく、人や技術、文化を安心して体感してもらえようような場を提供していきたいですね」

いろいろな人がいて、それでいいと思える。そんな世界に

耳かきで癒えて

「大好きなんです、シティリビング！ どれだけ好きかというのと書いてながらぶあついスクラップブックを見せてくれた中村さん。そこには神祕の切り抜きがいっぱい。「どんな方が取材に来られるか楽しみです」と。すいません、疲れ果てたかけろうのような人が現れて。決して者さだけではない、痛みに最後まで仕立てられればなし。福岡の女性ってほんと、すこい。編集長・野矢由香」